第 61 回神奈川建築コンクール　住宅部門　最優秀賞選評

審査委員　古賀 紀江

端正な住宅である。蔀戸を連想させる開口部の格子が玄関やラッパのように突き出ている上階の窓を覆う。住まい手が植えたコスモスの美しい庭から眺める姿は、自然素材を多用した意匠が背後に美しい緑の山を背負ったこの土地になじんでこれもまた、美しい。

ひとたび屋内に足を踏み入れると、外部の材料や部分の造作に仄見える和の記号とはやや趣を異にする情景が立ち現れる。方形に近い建物の四周に配された各室は、続き間とはならず、いずれも独立し、複数のアクセス経路を持つ。大きくはないこの家で複数の動線がとれるのは、各室の中央に位置する中央空間という名のバッファゾーンの存在による。「中央空間」とは大判 MDF（中密度繊維板）　耐力壁で構成された上階に突き抜ける約 11 ㎡の方形空間である。方形の各一辺の耐力壁で覆われない「空隙」は人や視線、風や光が抜けていく道である。十分に広いこれらの「空隙」には引き戸が仕込まれていて時に、中央空間を独立させて暗がりを演出することができる。この「空隙」上方にあるドット孔部分は暗がりへの光と家の中に爽やかな空気を供給する役をも担う。

「中央空間」は、ここに暮らす高齢の家族３人が互いの存在を感じつつ「会いたくなければ避ける」場所でもあるという。こうした中央空間の意味や各自の独立した個室とその配置はそのまま、老年期に至った家族が互いに自立した個人としての生活を可能にする計画の解の一つと理解することもできる。高齢の家族同士が、介護期にあっても互いに成熟した個人としての矜持を持って暮らす場としての住宅の計画である。

構造、プランの要であり、環境装置である中央空間はこの住宅の、知的で美しい見せ場にもなっていた。中央空間には、個人へ向けたデザインであることを超えた示唆が内在する。設計者の材料・構造の探究が住み手の希望に真摯に応えた計画を実現して生み出した、構造と計画が不可分一体のかたちが共感を生んだ。